HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オットー･バウアーのソビエト･ロシア論
Author(s)	上条, 勇
Citation	經濟學研究, 36(1), 49-72
Issue Date	1986-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31737
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(1)_P49-72.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 36-1
北海道大学 1986. 6

オットー・バウアーのソビエト・ロシア論

上条 勇

I バウアーとオーストロ・マルクス主義

小稿の目的は，「オット・バウアーとオーストロ・マルクス主義」研究の一環として，ロシア革命からネップをへて5ケ年計画にいたるまでのバウアーのソビエト・ロシア論を検討することにある[1]。まず，この時期におけるバウアーの政治的位置を述べることからはじめたい。

我が国では，オットー・バウアーという人物はほとんど知られていない。知られている場合であっても，せいぜい，バウアーが20世紀初頭のウィーンで活躍したオーストロ・マルクス主義者のひとりで民族問題の専門家であったという程度の位置づけしか与えられていない[2]。しかし，今日，ヨーロッパとくにオーストリアで再評価が叫ばれ，注目されているのは，戦間期のバウアーとオーストロ・マルクス主義である。

戦間期に，バウアーは，党創立者のヴィクトル・アドラーに代わって，オーストリア社会民主労働党（SDAP）の事実上の最高指導者となった。当時 SDAP は，国会選挙における得票率が40パーセントを超える大政党であった。首都ウィーンでのその革新的な自治体行政は，「赤いウィーン」の名で国際的に著名になった。オーストロ・マルクス主義という言葉も，当時バウアーの指導下にあったオーストリアの社会主義および労働運動そのものを指して用いられるようになった。その思想的な特徴は，簡単にいえば，次の二点にまとめることができる。

①議会制民主主義を通じた多数者革命による社会変革路線を追求したこと。つまり，バウアーらは，敵の出方によってはプロレタリア独裁の暴力的な方法をとることも辞さずと述べながらも，議会制民主主義を利用した平和的で漸次的な社会主義への移行を追求した。そして議会における多数者を獲得するために，農民政策，宗教問題，新中間層や知識人に対する政策など，当時考えうるありとあらゆることについて議論したのであった。

②コミュニズムと社会民主主義とに国際労働運動が分裂した状況下で，労働運動の統一を最高の目標の一つとして追求したこと。

以上の二つの特徴をもつオーストロ・マルクス主義は，今日の西欧で，先進国革命と統一戦線に関する先駆的な問題提起をなすものとして再評価されている。小稿の主題に関連していえば，とくに後者の労働運動の統一という目標が注目される。多少短絡的に言えば，この目標は，バウアーとオーストロ・マルクス主義の国際政

1）オットー・バウアーのソビエト・ロシア論を本格的に研究した労作として，Raimund Löw, *Otto Bauer und die russische Revolution*, Europaverlag, Wien 1980 がある。私は，レウの研究を大いに参考にしたが，後述のように，基本的な解釈において，レウと見解を異にしている。なお，邦語の研究文献として，酒井晨夫「ソビエト・ロシアとオットー・バオァー」（一橋大『経済研究』第25巻第1号，1974年1月）がある。

2）バウアーの民族問題論については，拙稿「O. バウアー『民族問題と社会民主党』の理論構成について」（『金沢大学経済論集』第21号，1984年3月），「＜要約紹介＞オットー・バウアー著『民族問題と社会民主党』(1907年)」（『金沢大学教養部論集・人文科学篇』22-1，1984年10月）を参照。

策とソビエト・ロシアに対する政策（対ソ政策）をも規定したのであった。この点，少し説明を加えておこう。

1923年5月に国際社会党協議会（Internationale Arbeitsgemeinschaft Sozialistischer Parteien，通称第二半インター）と第二インターの合同によって社会主義労働インター（SAI）が形成された。バウアーは，このSAIの執行委員となり，そのほとんどの大会で，国際問題の主要報告者として登壇した。SAIにおいて，オーストロ・マルクス主義を代表しバウアーが掲げた目標は，時期によって多少ニュアンスの差がみとめられるとはいえ，国際労働運動の統一であった。彼は，1920年代にSAIがますます右傾化を強め，ロシアに対する敵意をむき出しにしてボリシェヴィキ政権打倒の声さえ聞かれるようになるなかで，次のような対ソビエト・ロシア政策を堅持した。すなわち，①ボリシェヴィキに政治的民主化を要求する一方で，②帝国主義的干渉に際してはソビエト・ロシアを擁護するという政策である。バウアーのこうした主張は，彼とオーストロ・マルクス主義をSAI内の左翼に位置づけた。1920年代のSAIの対ソ政策は，様々な妥協や調整をへながらも，バウアーのこの主張によって規定されたのであった。

ところで，バウアーが如上の対ソ政策を打ち出したとき，その背景には，もちろん，ソビエト・ロシアの社会的動きに関する彼の透徹した認識があった。以下，彼のソビエト・ロシア論の検討にはいることにしたい。

II　初期のロシア革命観

バウアーは，ソビエト・ロシアと深い因縁に結ばれていた[3]。彼は，ロシア革命の初期の経過をペテルブルクで目撃した数少ない外国人のひとりであった。つまり，1917年7月，戦争の交換捕虜のひとりとして，ペテルブルクに滞在したのであった。レウによれば，当時バウアーは，マールトフの支持者であったポーランド人社会主義者ラピンスキーの家に泊まった。そして，メンシェヴィキ国際主義者のテオドール，リディア・ダン夫婦の家でほとんど毎日昼食をとり，多くの時間をそこで過ごした。臨時政府大臣であるスコベロフやツェルチェリと話す機会も得た。バウアーは，ペテルブルクに1ケ月ほど滞在し，1917年9月末にオーストリアに帰国した[4]。彼は，ただちにオーストリア社会民主労働党の左翼反対派のリーダーとなり，その国際政策を形成するうえで，ロシア革命の歴史的評価を試みた。

バウアーは，まず，1917年10月10日，『ロシア革命とヨーロッパ・プロレタリアート』という小冊子を発表して，2月革命について考察した。彼は，このとき，ロシア革命が農民，労働者，兵士によって担われたブルジョア民主主義革命を意味すると考えた。そして，当時のロシアは，まだ，社会主義にとって経済的に成熟していないとみなした[5]。したがって，バウアーにとっては，レーニンらボリシェヴィキは，マシンガンの全能を信ずる狂信家の集団のように思われた[6]。

ところが，1917年10月25日（旧暦）ボリシェヴィキ指導下に，10月革命が勃発した。この事態に直面して，バウアーを代表的な一編集員とするSDAP機関紙『アルバイター・ツァイツンク』は，ボリシェヴィキ自体に対する評価はさておき，10月革命を最初手ばなしに支持した。すなわち，パリ・コンミューンいらい初め

3）以下，拙稿「若きオットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義」（『金沢大学教養部論集・人文科学篇』22-2，1985年3月）Vの(2)に基づくと同時に，これを補足するものである。

4）R. Löw, a. a. O., S. 10 f.

5）Otto Bauer, Die russische Revolution und das europäische Proletaliat, Wien 1917, in: *Otto Bauer, Werkausgabe*（以下，*WA.*）Europaverlag, Bd. 2, S. 71ff.

6）Otto Bauers Brief an Karl Kautsky, 28. 9. 1917, in: *WA.*, Bd. 9, S. 1039.

て，ヨーロッパの一首都がプロレタリアートの掌中に落ち，プロレタリア独裁が樹立された。この10月革命は，「平和のための革命」であり，全国際プロレタリアートの利害において遂行されたものであると報じたのである。12月上旬，ウィーンでSDAPは，「民主主義と平和」というテーマで大衆集会を催した。そこでヴィクトル・アドラーがロシアに関する報告を行なったとき，聴衆は歓喜に包まれ，興奮状態に陥ったという。

しかし，10月革命に対する『アルバイター・ツァイツンク』紙のこのような手ばなしの肯定的な評価は，ボリシェヴィキによる制憲国民議会の解散を転機にして，一定の変化をみた。つまり，『アルバイター・ツァイツンク』紙は，権力を手放したがらないボリシェヴィキの気持は理解できるが，制憲国民議会の解散とともに労働者階級の孤立化と敗北へのレールが敷かれるにいたったと論評したのである[7]。バウアーは，このとき，ロシア革命の挫折を予測したが，ボリシェヴィキを攻撃することは拒否した。1918年1月4日付のカウツキー宛の手紙で，バウアーはこう述べている。すなわち，レーニンらは，行動せねばならなかったように行動している。西欧プロレタリアートは，ロシア人を助けることができなかったので，ロシア革命を自らの利害のために犠牲にすることを要求できない，[8]と。

バウアーは，1918年3月に「ボリシェヴィキと我われ」という論文を発表して，10月革命を包括的に考察した。彼は，このときもなお，ロシアが社会主義にとってまだ経済的に成熟していないと信じていた。しかし，当時の条件下ではボリシェヴィキの指導のもとでプロレタリアートが社会主義革命に突き進んでいったのも不可避であったと考えるのである。彼によれば，その結果，「ロシアの経済的後進性への社会主義の適応」として，特殊ロシア的な社会主義が生じた。これは，次の二つの特徴をもつ。

①民主主義ではなくソビエト独裁の形態をとったこと。

②労働者統制といった，サンジカリズムの理想を実現するが，本来の社会主義的組織原則から逸脱した社会主義の実験。

バウアーは，このように，社会主義の特殊ロシア的なタイプを指摘する。とはいえ，彼は，ロシアにおける社会主義のこの実験が成功するとは考えなかった。つまり，ロシアは，社会主義にとって経済的に成熟しておらず，反動諸勢力によって労働者政権も打倒されるであろうと予測した。しかし，彼は，カウツキーのように，ボリシェヴィキのロシアに対して敵意に満ちた批判を行なったのではない。むしろ，パリ・コンミューンに対するマルクスの先例を引きつつ，こう述べている。すなわち，我われは，プロレタリアートの階級的利害の国際的連帯のため社会主義の共通の理想のために，ボリシェヴィキの側に立たなければならない，と[9]。

以上，バウアーの初期のロシア革命観について説明してきた。とくに10月革命についていえば，バウアーは，社会主義革命の試みが歴史的に不可避であったことは認めるが，しかしそれは挫折の運命にある時期尚早の社会主義革命であったと主張している。この時点では，バウアーは，他の多くの社会主義者と同様に，マルクスの唯物史観の公式のうえに立って，社会主義にいたるためには資本主義のもとでの最高度の経済的な成熟が必要であり，したがって社会主義は先進国で真っ先に実現されると考えていた。彼は，唯物史観を多少機械的に適用して，後進国ロシアでは社会主義の実現が不可能であると唱えたのであった。しかし，バウアーは，後のロシアの現実の発展に応じて，一方では，唯物史観の公式のこの理解を維持しようとしながらも，他方では，特殊ロシア的な社会主義へ

7) 以上，『アルバイター・ツァイツンク』紙の論説については，R. Löw, a. a. O., S. 26ff による。
8) Ebenda, S. 29.
9) Otto Bauer, Die Bolschewiki und wir, (Der Kampf, 1918), in: *WA.*, Bd. 8, S. 924ff.

の道もありうるのではないかと，絶えず動揺しながら自説を再検討する態度をも示した。そして，ついには，1920年代中頃から，特殊ロシア的な社会主義への道の存在をはっきりと認めるにいたったのである[10]。

III　ボリシェヴィズムか社会民主主義か

周知のように，ソビエト政権は，ブルジョアジーや将校など反動諸勢力によって打倒されるといったバウアーの予想に反して，生きのびてゆく。このような現実に直面して，バウアーは，ロシア革命について再評価せざるをえなかった。彼は，そこで，1920年に『ボリシェヴィズムか社会民主主義か？』を著し，とくに戦時共産主義を詳しく分析した。そしてそのなかに，特殊ロシア型の社会主義として，「専制的社会主義」を見出した。バウアーは，この専制的社会主義に対して，ボリシェヴィズム（コミュニズム）と対抗する都合上，自らの社会主義観を対置している[11]。

(1) バウアーの社会主義観

1918年末にオーストリア革命が勃発していらい，ロシアの方法を模倣しソビエト独裁を樹立しようという志向が，オーストリアの労働者の間に強まり，バウアーは，ボリシェヴィズムとの政治路線上の対決をせまられた。ソビエト独裁か（議会制）民主主義かが，政治的争点となった。ソビエト独裁か民主主義かということに，バウアーは，ボリシェヴィズム（コミュニズム）と社会民主主義をへだてるメルクマールをみとめ，両者の相違について，具体的にこう述べている。

すなわち，ボリシェヴィズムは，協議会（レーテ）独裁の樹立を唱え，一撃で社会主義を実現しようと試みる。それは，後進国で社会主義を実現しようという企てを通して生じた。それに対して，社会民主主義は，経済的成熟に応じた漸次的平和的な社会主義への移行を考えている。本来社会主義は，労働者階級が人口の多数を占め組織化された，経済的に成熟した先進国で可能である。そして先進国の革命においては，議会制民主主義を通じた社会変革がもっとも適切である。というのは，議会制民主主義は，高度に発達した資本主義国における精巧な経済機構を攪乱せずして平和的漸次的に社会主義に移行することを可能にするからである，と。

以上のように，バウアーは，ボリシェヴィズムが後進国における社会変革の試みから生じたのに対して，社会民主主義は，高度に発達した資本主義国における議会制民主主義を通じた平和的な社会変革を目指していると主張している。社会変革に関する彼の構想をもう少し具体的にいえば，こうである。

すなわち，労働者階級は，選挙を通じ議会の多数者政権を握り，立法行為に基づき，鉄鋼業や石炭業など独占的に組織された大工業をまず社会化（社会主義化. Sozialisierung）する。そして，社会化された大工業を足場にし，中小経営や農民経営に対してはさしあたって組織化・合理化政策を講じて，漸次的長期的な社会全体の社会化を目指す。

以上，バウアーは，議会制民主主義を通じた漸次的な社会変革路線を唱えた。バウアーによるこうした民主主義の強調は，彼の社会主義観をも規定している。つまり，彼によれば，議会制民主主義は，社会主義社会において，人民の自決ないし自治を達成する適切な政治形態でも

10) ここで，レウの見解について一言しておきたい。レウは，前掲書で，唯物史観の公式にのっとってバウアーがソ連では社会主義が可能ではないとずっと言い続け，5ヶ年計画の進行を見て突然その考えを変え，ソ連における社会主義の可能性を認めるにいたったと主張している。私は，レウのこの解釈に対して，バウアーには特殊ロシア的な社会主義への道を考える側面があり，1920年代中頃にこれがはっきりと打ち出されるようになったことを，小稿で明らかにするつもりである。

11) 以下，拙稿「オーストリア革命とオーストロ・マルクス主義—オットー・バウアを中心に—」（『金沢大学教養部論集・人文科学篇』23-1，1985年10月）ⅡとⅢを参照。

ある。バウアーは，この点，社会主義が労働者階級の自決や自治を実現するものであり，そのために社会主義は自由や民主主義と不可分なものであると主張したのである。

こうした理由から，バウアーは，単なる国有化や計画経済化が社会主義にとって十分条件ではないことを強調している。彼によれば，生産手段の私的所有の廃止すなわち所有の社会化（Sozialisierung）は，それ自体としては単に法律的・形式的な変化を表わすものにすぎない。本当の社会主義は，労働・生産過程における勤労人民の自治や自決を意味している。この点，バウアーは，具体的には，彼の社会化案として，生産者・消費者・国家の各代表の三者管理によって運営される共同経済公社構想を考案した。さらに，これと並んで，労働者の労働条件の改善を主要任務とする労働者の経営協議会の形成をも提案している。バウアーのこの社会化構想は，オーストリア革命のなかで社会化委員会の活動を通して部分的に実施されるところまで行った。

以上，バウアーは，結局，社会主義とは，ほんらい勤労人民の自決つまり経済的政治的民主主義の実現を意味し，集会・出版・結社など様様な市民的自由と不可分なものであると主張した。彼は，このようないわば「民主主義的社会主義」観にたって，ボリシェヴィズムと対抗する意図から，ソ連の戦時共産主義がほんらいの社会主義から遠く隔たった「専制的社会主義」を体現するものであり，特殊ロシア的な事情から生じたことを強調するのである。以下，我われは，まずこれについて，①プロレタリア独裁，②専制的社会主義の二点に分けて検討したい。

(2) プロレタリア独裁の性格変化

バウアーによれば，プロレタリア独裁は，農民が圧倒的多数をなす後進国ロシアにおけるプロレタリアートの少数支配の政治形態である。

1918年7月の憲法で，ソビエト共和国が都市ソビエトと農村ソビエトの連邦として表示された。バウアーは，全ロシア・ソビエト大会の代議員選出制度の仕組みを取り上げ，こう述べている。すなわち，そこには，労働者と農民の間に著しい不平等がある。全ロシア・ソビエト大会の代議員は，都市ソビエトとガーバメント・ソビエト（都市ソビエトと農村ソビエトからなる）の代表からなる。その結果，労働者には，二重の選挙権が与えられるが，農民は，間接的にしか自らの代表を送ることができない，と[12]。

バウアーは，このように，農村ソビエトに対する都市ソビエトの特権的地位，したがって農民に対する労働者の特権的地位を指摘している。しかし，彼によれば，プロレタリアートの政治支配を支えているものは，こうした労働者と農民の差別というより，むしろ農民が政治的権利を行使しないことにある。つまり，ロシアの農民大衆は，政治的に組織されておらず無教育で，農村行政以上に政治的関心をもたない。農民は，国家が農村に変なことをしない限り，中央権力に対しては無関心である。だから都市プロレタリアートと革命的農村少数派は，農民の政治的無関心に乗じて，ガーバメント・ソビエト大会の支配権を握ることができる。もしもロシアで普通選挙が導入されるとするなら，ブルジョア政党が農民の無知を利用して，議会の多数派を形成するであろう。ソビエト制度は，ブルジョアを排除することによって，プロレタリアートが農民の政治的無関心の上にたって政治支配を貫くことを可能にした[13]。

バウアーは，このように，特殊ロシア的現象として労働者の政治権力がソビエト独裁の形態をとった理由を説明する。彼は，さらに，内戦期を通してこのソビエト独裁がなぜ官僚および共産党独裁に転化せざるをえなかったのかを考察している。箇条書き的にいえば，次の理由があげられる。

第一に，資本主義国家の支配装置を破壊した

12) Otto Bauer, *Bolschewismus oder Sozialdemokratie?*, in: *WA.*, Bd. 2, S. 269ff.
13) Ebenda, S. 274f.

後の混乱状態を克服する必要があった。ロシア革命の当初，地方ソビエトが独立的に無制限な支配を行使し，個別的な利害にしたがってバラバラな政策を遂行した。中央ソビエト権力は，それに対して自らの権威を確立する闘争を行なわなければならなかった。その第一の手段が，共産党の権威であった。地方ソビエトにおける支配政党としての共産党の影響力は，中央集権主義的な党組織のその性格からいって，中央国家権力を行使する党中央に地方ソビエトを服従させることを可能にした。

第二に，反革命がひき起こした内戦の論理である。反革命は，無制限な権限をもつチェーカーのテロル支配をまねいた。チェーカーの地方委員会を通じて，体制批判者は地方ソビエトから暴力的に排除された。また，新たに形成された赤軍では，指揮官の選挙制が廃止され，上意下達式の命令組織が復活した。このような上意下達方式は，行政の隅々まで浸透し，ソビエト行政の中央集権化と並行して官僚組織の肥大化をもたらした。それにともない行政や経済管理が複雑化すると，文字を書ける者は誰でも，とはいかなくなり，行政や経済を担う専門家が必要となる。こうしてソ連において新たな官僚体制が成立したのである。

第三に，支配装置がこのように尨大にふくれあがる一方で，プロレタリア独裁の基盤をなしたプロレタリアート自身は，内戦や飢餓によってますます数を減じた。失業や飢餓に強いられた帰農や，工業の破壊によって，工業プロレタリアートの社会的な力は失われ，彼らは，もはや自らの支配装置をコントロールしえなくなる。こうしてソビエト官僚や赤軍それに共産党といった支配組織は，プロレタリア的母胎から遊離しはじめ，プロレタリアートの上に立つ専制的権力としてたち現われるのである[14]。

バウアーは，1920年の時点で，以上のような理由から，ソ連でプロレタリア独裁が官僚・共産党独裁に転化したと結論する。彼は，少し後に，テロルの論理すなわち反対派抹殺の論理が，共産党独裁を共産党の中央委員会の独裁ひいては共産党の小グループの独裁に転化させてゆく必然性をもつとも強調している。したがって，バウアーにあっては，後のスターリン体制や官僚制社会の成立は，決してスターリン個人のせいでも，特定期におけるソ連の社会主義的理想からの逸脱でもなく，後進国ロシアの諸条件下で，ソビエト独裁という形でプロレタリアートが政治支配と社会主義の実現に踏み切らざるをえなかったことそれ自体から生じた後進国革命の宿命的な帰結であったといえる。

(3) 専制的社会主義

バウアーは，以上のように，ソ連においてプロレタリア独裁が政治の論理によって官僚・共産党独裁に転化せざるをえなかったと述べている。ところで，ソ連社会体制の専制主義的な性格は，経済の論理からも説明される。バウアーは，これについて，10月革命から1920年1月までのソ連の経済的動きを歴史的に説明することから考察をはじめている。

バウアーによれば，ボリシェヴィキは，最初，「大衆の創造力」に期待した。労働者統制がそれである。しかし，労働者統制が企業から資本家を追い出すところまで進み，国有化を余儀なくさせたとき，次のような問題が生じた。すなわち，文化的に後進的なロシアの労働者は，資本家に代わって経営を指導する能力を欠き，社会的労働過程における労働の機能的関連を維持しえなかった。経営は規律を失い，無政府状態に陥り，労働強度や生産性の破局的減退が生じた。その結果，サンジカリズム的ともいうべき，大衆の創造力を期待した労働者統制の時代は，終わりに向かった。大衆から政府へのイニシャティブの交代がなされた。政府は，経営の無政府状態に対処し，計画的体系的な国有化を進めるにあたって，経営者や専門家，技術者を高給で雇い，彼らに独裁的権限を与えることを強いられた。そして出来高賃金制やテーラーシステ

14) Ebenda, S. 276ff.

ムを導入し，労働者を強制的に規律に服させた。この頂点に，トロツキーによる労働の軍事化の試みがあった。今や軍事的規律下で男女を労働させ，テロルで反対や批判を封じ，すべての個人を服従させる全能の国家が出現するにいたった[15]。

バウアーは，このように1917年11月から1920年1月までのソ連における事実経過を整理している。そして，これを踏まえて，当時のソビエトの社会主義の性格を，次のように規定した。

「そこに発生しているのは，一つの社会主義社会である。というのは，労働手段を国有化し，資本の支配を打ち破り，労働収益の計画的直接的な社会的分配をなしているからである。しかし，それは，社会主義であるとすれば，特別な種類の社会主義すなわち専制的社会主義であろう。」[16]

バウアーは，あるいはこうも述べている。

「専制的社会主義は，ロシアの文化的後進性の産物である。」[17]

バウアーは，このように，ロシアの専制的社会主義が，その後進性のゆえに労働者が経営を指揮し労働規律を維持することに失敗した結果として生じたと述べている。つまり，経営指揮と労働規律の再建のために，国家が積極的にイニシャティブをとり，専門家や経営者に強力な権限を付与したのである。これは，プロレタリアートの力が弱体化する一方で進んだ政治権力の強大化や官僚装置の肥大化のプロセスと並行してなされた。その結果，プロレタリア独裁の性格も変化した。バウアーは，これについて改めてこう述べる。

「もしも10月革命後の初期の段階のようにプロレタリア大衆の意思の単なる執行機関ではもはやなく，ブルジョアジーや農民層のみでなくプロレタリアの広範な大衆自身に対してもその意思を強制する一つの党の独裁をプロレタリア独裁と呼ぶとすれば，それは，肉体をそなえたロシアプロレタリアの独裁ではなく，プロレタリアの理念の独裁である。」[18]

つまり，バウアーは，文化的経済的後進性のゆえにプロレタリアートが政治や経済の管理を自ら担いえないロシアでは，共産党が社会主義の理念を担いつつ代行的に政治・経済を支配する「プロレタリアの理念の独裁」が生ずるにいたったと主張するのである。官僚制や軍隊それにテロルによるこの共産党の代行的な政治や経済の支配を，バウアーは，「専制的社会主義」と呼んだ。

しかし，この専制的社会主義は，社会主義イコール人民の自決という彼の社会主義の定義とは矛盾するものであろう。バウアーの伝記を書いたユリウス・ブラウンタールは，バウアーの社会主義の定義からして，専制的社会主義という概念そのものがなりたたないと指摘している[19]。実際にバウアー自身も，後に彼の考えを少し変えている。バウアーは，1920年代中頃にはなお専制的社会主義という言葉を用いているが，1931年にはこう述べている。すなわち，国有化と計画経済は単なる社会主義的要素にすぎず，これらだけでは社会主義とはいえない。いわば国家資本主義ともいうべきものであろう。国有化と計画経済からなる国家資本主義が真の社会主義となるためには政治的経済的民主化が必要である，と。これについては，別稿で詳述する予定である。

(4) ロシア革命の性格規定

我われは，これまで，バウアーによる戦時共産主義の分析を取り上げ，彼がロシアの社会主義の性格をどのように把えていたかを考察してきた。ここでは改めて，バウアーが，この時点で，ロシア革命の歴史的性格をいかに理解していたかを問いたい。この点，結論を先取りして

15) Ebenda, S. 281ff.
16) Ebenda, S. 292.
17) Ebenda, S. 293.
18) Ebenda, S. 291.
19) Julius Braunthal, Otto Bauer. Eine Lebensbild, in: *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk*, Wien 1961, S. 42.

いえば，バウアーは，ブルジョア革命とプロレタリア革命の二面的性格においてロシア革命を捉えている。

まず，ブルジョア革命としてのロシア革命の側面を理解するために，バウアーは，ロシアの社会的基礎をなす農業問題を取り上げ，ロシア革命まで農業が相変わらず封建的性格をもっていたと指摘している。彼は，①雇役制の支配と，②ミール共同体の広範な残存といった二つの点において，これを考察している[20]。

バウアーによれば，1861年の農奴解放は，実際には農民からの土地の大強奪を意味した。土地の処分権は，ミール共同体に与えられ，農民の土地は相変わらず共同所有であった。狭められた土地の枠内で，しかも増大する農村人口に対応して土地の割替が行なわれたから，個々の農民家族への土地割当が減少した。その結果，農民は労働者になるか，地主から借地し，借地利子を支払うために地主の土地で働くことを強いられた。こうして雇役制が生じた。

バウアーは，この雇役制が，封建的搾取関係の法律上の形態変化を意味すると把えている。さらにミールについては，国家への納税や地主への弁済資金の支払いの責任を負わせられた点に注目し，ミールが封建制や絶対主義の搾取の道具に転化したと結論づけるのである。こうして，バウアーは，雇役制とミール共同体の二つにおいて，ロシアにおける封建制の遺制を見出した。そして，ナロードニキに対しては，ミールに社会主義の基礎を求めるのは幻想であり，現実にはミールが封建制の残滓であり，ロシアの農業の生産力発展の桎梏となっていると批判している。この点，バウアーは，ストルイピンの農業改革（1906年～）――農民に自由意志で共同体から脱退する権利を与え，富農の育成をめざした――に触れ，こう述べている。すなわち，この農業改革は，ミールに反対し私的所有を主張する声を強めると同時に，割替地の減少によって，ミールに残された農民の境遇の悪化をもたらし，彼らの不満を引き起こした。こうしてロシア革命の前夜，地主地の分配や私的所有への農民の要求が強められた，と。バウアーによれば，ボリシェヴィキ政権による土地布告は，エス・エルの土地社会化論に基づくものだが，その社会主義的外被にもかかわらず，実際には農民に土地を分配し，農民的土地所有か，私有に近い相続的土地用益権を生み出すものであった。換言すれば，「封建的農業制度を撤廃し，農村にブルジョア的所有制度を創造する」試みであった[21]。バウアーは，結論的にこう述べる。

「土地所有のブルジョア革命は，プロレタリアートの革命を通じてなされた。そしてまさにそこから，プロレタリア革命は，力を汲みとる。というのは，農民の所有とその運命は，プロレタリア革命と鎖でつながれているからである。そのため農民層は，反革命のどんな脅威に対してもプロレタリアートの独裁を喜んで擁護する。プロレタリア的少数者の支配は，億単位の農民人口の反革命に対する恐怖によって支えられている。」[22]

バウアーは，このように，ロシア革命がブルジョア革命としての性格をもち，労働者の政治支配が反革命に対する農民の恐れによって支えられていると主張している。バウアーのこの見解は，農民の私的所有を生み出すブルジョア革命の性格を強調するあまり，農民共同体が地主地の分配にあたって再生し，農村で重要な役割を果たすようになった事実を看過している。この特殊ロシア的現象としての共同体の再生の側面を看過したことは，後にネップ導入時にバウアーが資本主義の復活の動きを過大評価する原因の一つをなしたと思われる。

それはともあれ，バウアーは，この農業革命の点で，ロシア革命をフランス革命とのアナロジーで把える。したがって，バウアーには西欧

20) Otto Bauer, *Bolschewismus odr Sozialdemokratie* ?, a. a. O., S. 229ff.

21) Ebenda, S. 254.

22) Ebenda, S. 260.

的基準にたってロシア革命を評価しようという性向が強くみられるのであるが，アナロジーはここまでである。フランス革命でジャコバン独裁を担ったのは，小手工業の親方や職人であった。それに対して，ロシアではすでに高度に集積した大工業が発展しており，ロシア革命の担い手は，プロレタリアートであった。バウアーは，それゆえ，ボリシェヴィキの独裁がプロレタリア独裁を体現しており，「封建制を爆破したブルジョア革命は，直接的に資本主義を止揚するプロレタリア革命に転化」せざるをえなかったと述べている[23]。その際，彼は，1848年革命時のマルクス，エンゲルスを引き合いに出し，「マルクスが……フランス革命から抽象し，1848年にドイツ革命に指図したプロレタリア独裁の構想は，1917年のロシア革命に実現をみた」とも述べている。

以上のごとく，バウアーは，ロシア革命がブルジョア革命からプロレタリア革命に直接転化したものであるとみなした。それでは，彼は，かかるロシア革命がいったい将来どのような発展の道をたどると考えたのだろうか？

(5) ロシア革命の将来

既述のごとく，10月革命の当初において，バウアーは，10月革命が時期尚早の社会主義革命であり，次の二つの点で挫折の運命にあると判断した。すなわち，①経済的な未成熟と②農民に支持された反革命とによってである。ところが，バウアー自身も確認しているように，土地の分配をえた農民は，その後も予想に反してソビエト政権を支持した。農民の支持をえたソビエト政権は生き残り，ロシアの社会は，「専制的社会主義」ともいうべき体制にまで突き進んだ。この時点でも，バウアーは，唯物史観の公式にのっとって，ロシアの社会主義革命が挫折の運命にあると断定していたのだろうか？

バウアーは，この点，ロシアの将来の鍵を握るのは農民であり，農村と都市の対立であると指摘している。彼によれば，ロシアの農民は，今日では外敵や反革命に対してプロレタリア独裁を防衛する立場にたっているが，内戦が終了するや，労働の軍隊化に抵抗し，自らの要求を突きつける。こうして都市と農村の対立すなわちプロレタリアートと農民の対立が前面に出る。

バウアーは，このような都市と農村の対立のもとでソビエト政権が経済の再建を強いられるとすれば，もはや専制的社会主義が維持されえなくなってゆくと予測している。つまり，ロシアは，交通機関と工業を再建するために，外国から資材を輸入する必要がある。そのためには，外国からの信用供与が欠きえないし，また，ロシアの重要な輸出品は農産物である。国家は，農民に課税することによってこの農産物を調達する。それゆえ，将来，ソビエト権力と農民層の間に税率をめぐる闘争が不可避となるであろう[24]。

バウアーは，以上のように，経済再建のあり方をめぐって将来ソビエト権力と農民の対立が不可避となると述べている。その際，農民は，経済的文化的に水準が向上するにつれて，政治的に自覚をもつようになり，政治的権利を行使しようとする。バウアーは，その結果として，プロレタリア独裁も維持しえなくなり，農民が政治権力を握るようになると予測している。そして，この農民の政治的支配が，一時的に武断専制政治 (Cäsarismus) の形態をとりうるが，ただちに多数者支配にふさわしい政治体制として，民主主義の方向に向かうであろうと述べている。バウアーによれば，結局，ロシアにおけるプロレタリア独裁は，民主主義や民主国家へ向かう一過渡的局面を意味するのである[25]。といっても，彼は，そのとき，ただちに資本主義が復活すると考えているのではない。我われにとって興味深いのは，バウアーの次のような経済発展の見通しである。

23) Ebenda, S. 294.

24) Ebenda, S. 298.

25) Ebenda, S. 299f.

すなわち，工業や銀行における国家資本主義，商品販売における協同組合組織，農民的私企業，農民の私経済から成長する新しいブルジョアジー，利権に支えられた外国企業――これらが新しいロシア経済を構成する諸要素である。「こうしてロシアは，我われが過去の経験に基づく科学から測り知れない『社会的混合形態』にいたる。どれだけこの社会制度が社会主義的特徴をもつか，それとも資本主義的特徴をもつかは，他の世界で資本主義が克服され，社会主義的生産が打ちたてられる程度にかかっている。」[26]

バウアーは，このように，専制的社会主義から資本主義でも社会主義でもない「社会的混合形態」に移ってゆくと述べている。この社会的混合形態は，これまでの科学ではおしはかることのできないものである。すなわち，バウアーは，ロシアの社会発展が唯物史観の公式の機械的適用によっては割り切れない側面ももっていることを認めている。そして，図式化していえば，専制的社会主義→「社会的混合形態」→民主主義的社会主義といった将来の発展の道筋を描いている[27]。この見通しは，ロシアの社会主義の実験が反革命や経済的未成熟にぶつかって挫折や失敗せざるをえないというかつての彼の見解から大きく変化したものであった。しかし，我われは，ここで，バウアーが，「他の世界」で社会主義が実現される程度にロシアの社会主義化がかかっていると但し書きを付与していることも看過できない。つまり，ここでバウアーは，ロシアにおける一国社会主義の可能性を述べているのではなく，ロシアの社会主義化を西欧革命の一環として考えているのである。とはいえ，レーニンを含めて当時の社会主義者はほとんどロシアにおける一国社会主義の可能性を認めておらず，この点でバウアーと類似した見解を示していたとも指摘しておかなければならない。

以上，バウアーは，①農民の経済や文化的政治的向上に基づく政治的民主主義の実現，それに②「社会的混合形態」をへた民主主義的社会主義への道という形で，ロシアの将来の展望を描いたのであった。我われは，バウアーのこの見解について，とくに前者に関してバウアーの述べたような政治的民主化にロシアはいたらなかったと述べることができる。そもそも，バウアーからは，政治的民主化の具体的な道筋について聞くことはできない。農民による政治権力の獲得は，ソビエト政権の暴力的打倒という形をとるのか？その際反革命に転じることはないか？農民の政治権力下，プロレタリアートはどのような地位におかれるのか？ロシア革命が達成したプロレタリアートの社会的成果はどうなるのか？農民の政治支配下で，「社会的混合形態」が維持されるのだろうか？農民の政治支配が民主主義に結びつく必然性はあるのか？我われは，これらの疑問に対して，バウアーから回答を聞くことはできない。この点，バウアーにあっては，歴史や経済の発展における政治「権力」の役割なり独自性なりについていちじるしい過小評価があったと言わざるをえない。

IV　ネップ下のロシアと SAI

(1) ネップに対する評価

周知のように1921年3月，戦時共産主義に対する全般的な不満に対処するために，ロシアで

26) Ebenda, S. 301.

27) レウは，バウアーの「社会的混合形態」規定について，社会主義ではなく，混合経済を述べているにすぎないとみなしている。彼は，資本主義とも社会主義ともいえない「社会的混合形態」の過渡期社会的な性格をまったく無視している。そして，バウアーが専制的社会主義を歴史的に存続可能な道とみず，「長期的にはロシアにおいて社会主義的発展が不可能である」という考えを固持したと主張している (Röw, a. a. O., S. 64)。過渡期社会としてのこの「社会的混合形態」規定は，ネップ導入時に一時的に後景に退けられるが，1920年代中頃に復活し，ロシアにおける社会主義への道に関するバウアーの見解を規定することになる。この「社会的混合形態」規定の無理解から，バウアーが五ケ年計画導入までロシアにおいて社会主義的発展が不可能であると考えていたというレウの誤まった解釈が生じたといえる。

新経済政策すなわちネップが導入された。ネップによって，食糧税が導入され，余剰穀物に関する農民の自由商業が認められた。

バウアーは，こうした新事実に対して，さっそく1921年11月，『ロシアにおける新路線』という小冊子を発表した。そして，「ボルシェヴィキの新路線は，ロシア革命の社会発展諸傾向に対する私の予言〔の正しさ〕を完全に実証した」と述べたのであった[28]。しかし，その際，彼は，『ボリシェヴィズムか社会民主主義か？』で「予言」として述べた自己の見解を，ことわることもなくかなり修正しているのである。前述のごとく，『ボリシェヴィズムか社会民主主義か？』では，バウアーは，農民による政治的支配の獲得と政治的民主主義の実現を予測する一方で，社会主義と資本主義の性格をあわせもつ「社会的混合形態」への展開を展望したのである。しかし，彼は今やこの「社会的混合形態」に言及する場合，その資本主義とも社会主義とも言えない性格には触れず，資本主義の復活を強調するのである。すなわち，レーニンの「ソビエト・ロシアの新経済政策の前提条件と意義」を検討しつつ，こう述べている。

「我われが再生を目にするのは，資本主義経済である。すなわち，新ブルジョアジーが支配し，何百万もの農民経営に支えられ，国家の行政もそれに適応を余儀なくされる資本主義経済である。ロシア・ボリシェヴィキは，ロシア国民のごく少数しかなさないのに，工業プロレタリアートが億単位の農民大衆に対して独裁を樹立し，テロルによって国民の大多数を抑えさえすれば，社会主義社会秩序を強要しうると思った。経験は，別のことを教えた。革命によって初めて封建制の枷から解放された後進的な何百万もの農民経営――その間にロシアのわずかな都市と工業地域が小さな島をなしているにすぎない――の上に，社会主義秩序を打ち建てることはできない。農民大衆の抵抗がソビエト政府に自由取引への復帰を強いるや否や，商業自身の内的論理によって，全資本主義的経済組織が再建される。この生き生きとした歴史的発展において，マルクスの歴史観の根本思想が実証されているのが見出される。」[29]

バウアーは，このように，ソ連において，商品経済の発展が新しいブルジョアジーを生み，資本主義の復活をもたらすと述べている。とはいえ，その際，彼は，次のような資本主義の復活を具体的に描いていたのも事実である。

「しかし，この場合に，ロシア工業の大部分は国有化されたままでありえ，プロレタリアートが革命の主要な社会的成果を維持しえ，発生しつつある民主主義にソビエト制度の本質的要素が移されうる。こうしてロシアの民主主義は，社会主義的にさらに発展する本質的で発芽力のある諸要素を維持しうるであろう。」[30]

つまりバウアーは，社会主義への発展の芽をかなり含んだ資本主義の復活を予測している。しかし，混合経済的な側面はなおも強調されているとはいえ，もはや資本主義でも社会主義でもない「社会的混合形態」規定は，とりあげられない。むしろ，資本主義の復活に応じて，プロレタリア独裁から，新ブルジョアジーと農民が政治支配を獲得するブルジョア民主主義への転換が必須となるとみなしている。この点，彼は，ロシア経済の工業化のためには，外国の信用や資本が必要であり，世界市場に再び組みこまれるための政治的前提として，ブルジョア民主主義が不可欠となると述べている。そして，ボリシェヴィキに，平和的にブルジョア民主主義に転換することを薦めている[31]。

バウアーは，こうした考えから，ロシア革命の歴史的性格について，ブルジョア革命と社会主義革命の二つの側面を認めるかつての見解も放棄している。つまり，彼は，ロシア革命がブルジョア革命であり，そのプロレタリア独裁も

28) Otto Bauer, Der "Neue Kurs" in Sowjetrußland, Wien 1921, in: *WA.*, Bd. 2, S. 431.

29) Ebenda, S. 444.
30) Ebenda, S. 456.
31) Ebenda, S. 445ff.

ジャコバン独裁のようにブルジョア革命の一歴史的エピソードにすぎないとまで断言するにいたった。彼によれば，ロシア・コミュニズムは，ブルジョア革命時における平民大衆の幻想と似たようなものであり，生産力の低発達水準の壁にぶつかって挫折せざるをえない。結局，バウアーは，ロシア革命初期に彼が述べた見解にかなり立ち戻っているように思われるのである[32]。

我われは，こうしたバウアーの見解に対して，新ブルジョアジーの形成の動きを過大評価し，あまりにも西欧的規準でものごとを判断しすぎていると指摘することができよう。とくに，ここでも，経済の動きから短絡的に政治権力の問題を考えるバウアーの弱点が示されていると言わざるをえない。周知のように，レーニンらは，農民に経済的に護歩し，ネップを導入する一方で，政治的にはむしろ共産党内での分派形成を禁止するなど締めつけを強化し，プロレタリア独裁を固めることに努めたのであった。その結果，ソビエト・ロシアの歴史的発展に関するバウアーの見通しも大幅にはずれてしまう。バウアー自身，これをすぐ後に修正せざるをえなかった。次に，彼が見解を修正するにいたった経緯についてみてみよう。

(2) 一国社会主義？

1．1924年末にイギリス労働組合代表団が訪ソしていらい，オーストリアでも労働者代表団をソ連に派遣しようというキャンペーンが，共産党 (KPÖ) のイニシャティブのもとに展開された。そして，1926年1月，オーストリア労働者代表団が訪ソするにいたり，SDAP 指導部の反対を押し切って，多数の社会民主党員が共産党員とともに参加したのであった。代表団員は，帰国後，ソ連の賃金水準の高さや社会保障の充実について報告し，労働者に少なからざる影響を与えた[33]。バウアーは，訪ソ労働者代表団に社会民主党員が参加することには反対であった。彼は，代表団派遣に，社会民主党から労働者の支持を奪おうというコミュニズムの宣伝を読みとった。そこで，彼は，1925年12月のウィーン活動者会議での報告「社会民主党とソビエト・ロシア」と1926年4月のウィーン活動者会議での演説の二度にわたって，ネップ経済下のソビエト・ロシアに関して考察している。

以下，「社会民主党とソビエト・ロシア」という報告を中心にして検討すると，バウアーは，コミュニストが社会民主主義者を裏切り者呼ばわりをし，誹謗中傷する限り訪ソしえないと一方で主張しながらも，ネップ下のソビエト経済について次のような積極的な評価を与えている。

すなわち，「最近のもっとも重要な出来事の一つは，疑いもなく，ロシアにおいてなされた経済生活とそれに労働者階級の生計に関する重要な前進である。」農業について言えば，家畜数が増加し，ネップにおける自由商業の導入によって，戦前水準にはるかにおよばないとはいえ，農業が再建された。工業も，高率保護関税政策に守られ，急速に再建された。もっとも，工業は，その労働生産性が低く，国内需要を充足しえず，また，農村からの過剰人口を吸収しえないのであるが。それはともあれ，賃金水準は改善され（官報によれば，それでも鉱山労働者の賃金は戦前の66.5パーセント），社会福祉も充実しつつある。その結果，労働者は，ソビエト政権により多くの信頼をもつようになっている[34]。

バウアーは，このように，ネップ導入後5年間のソビエト経済の発展を積極的に評価している。そして，興味深いことに，ソビエト社会の特徴や将来について，こう述べている。

「ロシアにあるものは，なお社会主義でないが，資本主義でもない。ロシアは一つの過渡状

32) Ebenda, S. 450ff.
33) Raimund Löw, a. a. O., S. 117-119.
34) Otto Bauer, Die Sozialdemokratie und Sowjetrußland (Wiener Vertrauensleute, 1925), in: *WA.*, Bd. 6, S. 387-392.

態にある国で，その経済は，非常に多くの資本主義的要素を含んでいるが，また，非常に多くの社会主義的要素も含んでいる。大工業や外国貿易，それに国内商業の大部分は国家に属し，残りの部分は協同組合に属している。資本主義は，経済の大きな部分から排除されている。西欧資本主義は今日我われになおこう言いうる。すなわち，そこでは価格はなお高く，あまりにコスト高く生産されており，目下のところ資本主義工業の方がよりすぐれている，と。これは今日なお争いがたい事実だが，しかし我われは，進歩をみており発展の傾向をみている。それ故，もしもロシア人をそっとしてやるならば，彼らはさらなる前進をとげ，……資本家なくして〔経済が〕なりゆくという実験的証拠を実際に提出すると希望しうる。」[35]

つまり，バウアーは，ここで，1921年のネップ導入時におけるように資本主義の復活をもはや単純に言わない。むしろ，1920年の『ボリシェヴィズムか社会民主主義か？』における彼の「社会的混合形態」規定に立ち戻っている。それればかりか，より積極的に，もしも帝国主義的干渉がなければという限定を付与しつつも，ソビエト・ロシアが一国で社会主義への道を歩むことができると主張するにいたっている。「ボリシェヴィズムか社会民主主義か？』では，バウアーは，西欧革命の進展との関連でソ連の社会主義化の可能性を考えていたのにすぎなかった。ところが，今では，国際プロレタリアートの援助下，ソ連一国で社会主義に進みうると主張しているのである。つまり，バウアーは，1925年末の時点で，ネップを通じた工業化そして社会主義への道が可能であると唱えるにいたった。換言すれば，彼は，ネップをロシアにおける社会主義への現実主義的路線だと捉えなおすにいたったのである。

ただ，この点，注意しなければならないのは，バウアーが，1926年4月の演説において，社会主義について，次のようにも述べていることである。

すなわち，ロシアで生産手段が国有化したのは偉大な事実だが，国有化はまだ社会主義を実現するものではない。社会主義は，同時に国家自身が労働者階級によって支配された場合にのみ生ずる。だから，国家において政府が労働者の自由意志に基づき形成され，これに従うことが重要である[36]，と。

バウアーは，このような考えから，ソビエト・ロシアの政治的民主化の措置として，具体的には，「社会民主主義諸政党の合法化とソビエト選挙の秘密投票」という要求を掲げた[37]。彼は，別の個所では，こうも述べている。すなわち，ソビエトつまり労働者レーテは，労働者自身によって自由に選出されるものであるならば，非常にすばらしい制度である。そのためには，しかし，秘密投票を必要とする，と[38]。つまり，彼は，ソビエト・ロシアに議会制民主主義を押しつけようとしたのではなく，ソビエト制度の民主化を要求したのであった。その際，彼は，議会制民主主義と並んでもう一つの民主主義の形態をソビエト制度のなかに認めたといえる。

2．バウアーは，以上のように，帝国主義的対ソ干渉がなければ，ネップ下の経済の発展が，政治的民主化をへてソ連を社会主義に導く可能性をもつと主張するにいたった。つまり，彼は，かつての戦時共産主義の方法がソ連の現実的諸条件に適合しないボリシェヴィズムの幻想であり，決して社会主義を実現しえないと考える一方で，ネップを社会主義への現実主義的路線を意味すると捉えるにいたった。ところで，ネッ

35) Ebenda, S. 393. レウは，彼の基本的見解と矛盾するバウアーのこの発言を紹介するにとどまり，何の注釈も加えていない。(Raimund Löw, a. a. O., S. 119)。

36) Otto Bauer, Bericht über die Sowjetunion (Wiener Vertrauensleute, 1926), in: *WA.*, Bd. 6, S. 407.

37) Ebenda.

38) Otto Bauer, Die Sozialdemokratie und Sowjetrußland, S. 396.

プのこうした理解は，1920年代のロシア共産党（ボリシェヴィキ）の党内闘争に対するバウアーの態度なり評価なりを規定したといえる。以下，この点，少し立ち入って説明したい。

周知のように，1922年中頃にレーニンが病に倒れていらい，その後継者争いが次第に表面化するようになった。1923年には，スターリン，カーメネフ，ジノヴィエフのいわゆるトロイカとトロツキーとの対立が公然化するにいたった。『アルバイター・ツァイツンク』紙上でバウアーらは，この「権力闘争」にあまり政治的な意義を認めなかった。注目すべきことに，その際，トロツキーは，ロベスピエールにたとえられ，ボリシェヴィキのなかでなおも革命的理想主義・空想主義を表わす部分の代表者だとみなされた。バウアーらは，工業化や計画経済化に関するトロツキーの主張も，戦時共産主義的な幻想を意味すると把え，ネップ下のソビエト・ロシアの現実の展開にあって挫折せざるをえないと論評した。注目すべきことに，トロツキーら反対派の民主化要求もそれほど積極的に評価しなかった。つまり，トロツキーらが要求するのは，政治的民主主義の実現ではなく，共産党の党組織の民主化にすぎないという。バウアーらは，結局，スターリンらトロイカの方を，ネップの現実主義路線を代表する勢力として，積極的に評価したのであった[39]。

さらに，1926年，トロツキー，カーメネフ，ジノヴィエフら連合反対派とスターリン，ブハーリンとの闘争が生じた。バウアーは，1926年12月に「バウアーシチナ？」という興味深い論説を書き，さっそくこの闘争を論評している。彼は，両者の主張点を，まず，次のようにまとめている。

スターリンらは，ロシアにおいて国営大工業の発展と農民協同組合の促進を通じて，一国社会主義の建設が可能であると述べる。それとは反対に，ジノヴィエフらは，社会主義が世界革命勝利の場合にのみ可能であり，今のロシア経済は，社会主義ではなく，社会主義的要素を含むが，これと並んで強い資本主義的要素ももつと主張する。スターリンらは，この批判に，こう答える。すなわち，ジノヴィエフらは，ロシアにおいて社会主義ではなく，社会主義＝資本主義混合体の発展を期待している。これは，バウアーが1920年に予言したものである。君たちの見解は，バウアーシチナだ，と。反対派は，スターリンのかかる批難に，逆に，世界革命の勝利を信じない君たちこそ，「民族改良主義」に陥っていると反論する[40]。

このように，バウアーは，一国社会主義か世界革命かということに，闘争の争点を見出している。そして，こうした「理論」闘争が生じた理由を明らかにするために，ネップ下のソ連経済の発展の仕組に立ち入って，こう述べている。

ソ連経済における社会主義的要素をなす国営大工業の発展は，必然的に資本主義的要素を発展させざるをえない。つまり，国有化大工業の発展は，工業用生産手段を外国から輸入することを必要とする。この輸入のためには，穀物輸出を増加する必要がある。ところが，輸出用の穀物余剰の増加は，自家消費用に生産する小農だけでなく，大農の生産の奨励に基づいている。この大農，クラークの奨励は，その生産物を販売する商業や大農の需要を満たす小工業の発達を促し，こうして新しいブルジョアジーを強化するのである。その結果，ソ連経済において，社会主義的要素と資本主義的要素が，手をあい携えて発達するのである[41]。

バウアーは，このように，ネップ下のソ連経済の発展は，この段階では必然的に社会主義と資本主義の「社会的混合形態」をとらざるをえないと主張している。バウアーによれば，こうした経済的事実は，政治の性格をも規定せざるをえない。すなわち，プロレタリア独裁を自称

39) Raimund Löw, a. a. O., S. 83ff.

40) Otto Bauer. Bauerschtschina？ (*Arbeiter-Zeitung*, 1926), in: *WA.*, Bd. 7, S. 396-398.

41) Ebenda, S. 398f.

する共産党の独裁は，実際には，国営大工業を発展させるために，農民層とブルジョアジーの経済発展をも奨励せざるをえず，三つの階級の抗争する利害のバランスをとらなければならなくなっている。その結果，共産党独裁は，三つの階級の利害のバランスの上になりたつ絶対主義にも似た権力となっている[42]。

前述のごとく，バウアーは，1921年当時は，ブルジョアと農民が政治権力を握り，政治的民主化を実現するという見通しを述べていた。しかし，この見通しははずれ，相変わらず共産党の独裁が存続している。バウアーは，今や，この独裁がプロレタリア独裁ではなく，農民，ブルジョアジー，労働者階級の階級均衡の上になりたち，絶対主義的な性格をもつにいたっていると理解している。バウアーによれば，この絶対主義的な性格をもつ共産党独裁は，すべての階級に対する社会的労働収益の配分割り当てを上から決定する。この配分割り当てをめぐる闘争は，共産党独裁下では，統治者内部での抗争となって現われる。具体的にいえば，カーメネフは，労働収益の配分が，労働者を犠牲にし，大農とブルジョアを強化する形でなされており，ソビエト権力に対する政治的危険を生み出すことになろうと，スターリンらを批判する。これに対して，スターリンは，国営大工業を発展させるためには，労働者の犠牲等はやむをえないのだと反論する。スターリンらは，世界革命が近いうちに生じないという現実を直視して，資本主義的世界環境のなかで現実主義的に対応しようと試みる。それに対して，反対派は，これがボリシェヴィズムの古い信条と矛盾する点を突く[43]。

バウアーは，このように，世界革命か一国社会主義か，といった「理論」闘争が，ソ連経済の立たされた現実に関する理解の相違や労働収益の分配上の利害対立と結びつき，これらを反映したものであることを明らかにする。そして，この闘争の意義を，次のように評価している。

「反対派に対するスターリンの勝利――それは，ボリシェヴィズムのイデオロギー，伝統，過去に対する仮借のない経済的必然性の勝利以外の何ものでもない。」[44] しかし，スターリンは，彼の現実主義路線が社会主義をめぐるレーニンの旧路線を歩んでいると，理論的に粉飾する。その上で彼は，周囲が資本主義である限り，ロシア社会が社会主義ではなく，社会主義的要素と資本主義的要素からなる混合体制であるとカーメネフが主張するのに対して，社会民主主義的であり，バウアーシチナであると批難する。実際には，ロシア経済の発展傾向に関する反対派の理論上の判断は，1920年（1921年でないことに注意－筆者）に私が予言したものに近づいている。他方，実践においては，スターリンは，まさに私が予言したことを実行している。結局，反対派の理論的バウアーシチナは，スターリンが実践的バウアーシチナを実行する際にこれを隠蔽するために用いた古いイデオロギーを引き裂いたことに意義がある[45]。

バウアーは，このように，反対派の世界革命構想などにボリシェヴィズムの古い幻想を見出すが，他方でスターリンの「実践的バウアーシチナ」のイデオロギー的仮面をはいだ点に，その主張の積極的意義を認めている。バウアーによれば，スターリンは，「社会的混合形態」を通じた社会主義への現実主義的路線を歩む一方で，理論的には一国社会主義論を唱え，ソ連がすでに社会主義に入っているかのような印象を与えている。バウアーは，スターリンのこうした現実主義的路線を評価し，その立場に立ちながら，一国社会主義論に対してはこう批判する。すなわち，ソ連の政治的民主化を達成し，国際プロレタリアートの統一を再建し，その支援をえて初めて，資本主義世界のまっただなかで，大農民国ロシアは社会主義を実現する保障

42) Ebenda, S. 399.
43) Ebenda, S. 399f.
44) Ebenda, S. 400.
45) Ebenda, S. 401.

を得られるであろう，と[46]。これに関連し，次に，国際プロレタリアートの統一問題等に関するバウアーの見解を検討したい。

(3) SAI とソビエト・ロシア問題

既述のように，バウアーは，10月革命の当初，パリ・コンミューンに対するマルクスの先例を引きつつ，たとえ失敗の運命にあるにせよ，ロシア革命を資本主義的干渉から擁護すべきであると主張したのであった。それいらい，バウアーは，帝国主義的干渉からソビエト・ロシアを擁護せよ，といった主張を一貫して維持した。彼は，ソビエト独裁と専制的社会主義がたとえ特殊ロシア的なものであろうと，社会主義をめざしており，ロシアのプロレタリアートの利害を一定反映するものであり，この点で国際プロレタリアートの利害と一致しうると考えた。ただ，その際彼が反対したのは，第一に，特殊ロシア的と彼がみなす方法を西欧労働運動に押しつけること，第二に，ソビエト独裁体制を永続化することであった。結局，バウアーは，帝国主義的干渉に対してはソビエト・ロシアを擁護する一方で，ソビエト・ロシアの政治体制を民主化するという要求を打ち出した。そして，このような政策に基づき，国際プロレタリアートの統一の再建を目指した。国際プロレタリアートの統一の再建というこの主張は，時期によって力点のおきどころが異なるとはいえ，1920年代におけるバウアーのインターナショナル政策を貫いた。以下，この点少し，歴史的推移にしたがって整理しておこう。

1921年2月，コミンテルンにも第二インターにも所属しない各国労働者政党を集めて，国際社会党協議会（通称第二半インター）が創立された。この創立の積極的なイニシャティブをとったのは，実は，バウアーらオーストリア社会民主主義者であった。彼らは，国際社会党協議会の最大の目標として，すべてのプロレタリアートを包括する新たなインターナショナルの形成を掲げたのであった。このような目標に基づき，1922年4月，国際社会党協議会の呼びかけで，三つのインターの会議が開催された。この会議で，バウアーは，国際労働運動の統一を目指して，反動が強化された当時の国際情勢下，生活防衛など一致できるところでプロレタリアートの国際共同行動を展開することを提起した[47]。しかし，会議は，コミンテルンと第二インターの相互告発や批判の応酬の場となり，ついには挫折するにいたった。

バウアーらは，この挫折の苦い経験をへて，コミンテルンを含めた新しいインターの形成は当面無理だと考えるようになった。そして，その後，情勢の推移におされて，1923年5月，ハンブルクで国際社会党協議会と第二インターの合同がひとまず企てられ，社会主義労働インター（SAI）が形成されたとき，積極的にこれに加わっていった。この SAI 創立大会では，バウアーは，「国際反動に対する国際的闘争」という報告を担当したが，旧第二インター系の反ボリシェヴィキ的な気分を思いはかって，ソビエト・ロシア問題についてはわずかに言及するにとどまった。それでも彼は，「ボリシェヴィキと我われがどんなに相違しようとも，反革命的干渉に対してロシア革命を擁護することは我われの最大の任務であり，そうあり続ける」と明言したのであった[48]。結局，1923年の SAI 創立大会では，ソビエト・ロシア問題は，ほとんど取り上げられなかった。SAI が，ソビエト・ロシア問題を正面から取り上げたのは，1925年8月に開催されたマルセイユ大会において初めてである。したがって，以下，マルセイユ大会におけるバウアーの発言を少し詳しく検

46) Ebenda.

47) Otto Bauers Rede auf der internationalen Konferenz der drei internationalen Exekutivkomitees in Berlin vom 2. bis 5. April 1922, in: *WA.*, Bd. 6, S. 82ff.

48) Otto Bauer, Der internationale Kampf gegen die internationale Reaktion (Rede an den Internationalen Sozialistischen Arbeiterkongresses in Hamburg 21. bis 25. Mai 1923), in: *WA.*, Bd. 6, S. 93.

討することにしたい。

1925年7月，バウアーは，「マルセイユ大会」という論説を『カンプ』誌上に発表して，SAIマルセイユ大会で議論すべき方向性を示した。彼は，そのなかで，SAIの基盤が固まった今，これまで回避してきた原則問題に関する議論も行なうべきであると述べて，ソビエト・ロシア問題を取り上げ，とくにイギリス労働党左翼とカウツキーの二つの見解を批判している。

まず，イギリス労働党左翼は，国際労働組合運動を通じて，親ボリシェヴィキ的な立場に当時立っていた。バウアーは，それに対して，ボリシェヴィキを無批判的に支持すべきではないと非難し，こう述べる。すなわち，ボリシェヴィキは，中国，インド，中東の植民地民族解放運動の先頭に立ち，反革命民族に対する革命民族の新たな世界戦争を目指している。彼らのこの目的は，新しい世界戦争を阻止し平和を確立しようというSAIの最高任務に反する，と[49]。

バウアーは，このように，イギリス労働党左派を批判している。ボリシェヴィキが新たな帝国主義的世界戦争を不可避とみるだけでなく，世界戦争を望むといった命題に関して，しかし，バウアーはいかなる典拠も示してはいない。とはいえ，彼は，その後，繰り返しこの見解を表明することになる。ところで，バウアーは，こうした観点から，労働党左翼の親ボリシェヴィキ的な立場を批判したとすれば，他方で，カウツキーの次のような反ボリシェヴィキ的な見解を俎上にのせている。

すなわち，カウツキーは，1925年5月に『インターナショナルとソビエト・ロシア』という小冊子を発表して，こう述べている。すなわち，ボリシェヴィキの専制主義は，ツァーリ専制主義と区別されるものではない。ボリシェヴィキは，プロレタリアートのもっとも危険な敵であり，ハンガリーのホルティ政権やイタリアのムッソリーニのファシスト政権よりも悪い。それゆえ，ボリシェヴィキを社会主義的な兄弟党として扱うべきではない。むしろ，社会民主主義者は，将来において起こりうるボリシェヴィキに対する人民の蜂起に備えて，「精神的な」指導を引き受けるべきだ，と[50]。

バウアーは，これに対して，「我われみんなが師と仰ぐ……カウツキーのような人でさえ，ボリシェヴィズムに対する我われの立場を，ルイ・ナポレオンに対する共和主義者の立場とのアナロジーで捉えるまで行っている」と嘆じ，批判を試みるのである[51]。バウアーは，ボリシェヴィズムの性格について，まず次のことを強調している。

ボリシェヴィキは疑いもなく，ロシアプロレタリアートの一部に支持されており，革命的社会主義政党である。しかし，それは，職業革命家の党であり，自己の理想を実現する手段としてプロレタリアートを動員し，生産手段を支配する官僚の独裁にプロレタリアート自身を従属させている。ボリシェヴィズムは，専制的社会主義であり，生産過程における労働者の自治を意味するプロレタリア自身の民主主義的社会主義とは対立する。それは，自己の理想の実現のためには新たな世界戦争も恐れない職業革命家の社会主義である[52]。

すなわち，バウアーは，カウツキーとは異なり，ボリシェヴィキが，労働者の一部に支えられた社会主義政党であることを認めており，ボリシェヴィズムも特殊ロシア的な社会主義の一変種であることを強調している。注目すべきことに，バウアーは，この時点でも，専制的社会主義という言葉を用いている。とはいえ，ここでは，専制的社会主義は，ソ連の経済体制の現実を表現しているというより，ボリシェヴィズムの思想そのものを特徴づける言葉として用いられていると考えられる。というのは，前述のごとく，バウアーは，ほぼ同じ時期に，ソ連経

49) Otto Bauer, Der Kongreß in Marseille (*Der Kampf*, 1925), in: *WA.*, S. 99–101.

50) Raimund Löw, a. a. O., S. 115f.

51) Otto Bauer, Der Kongreß in Marseille, S. 99f.

52) Ebenda, S. 102.

済の現実を資本主義と社会主義の混合体制すなわち「社会的混合形態」と呼ぶにいたっているからである。

ところで，バウアーは，ボリシェヴィキの専制的社会主義も社会民主主義の民主主義的社会主義もともに社会主義であり，そこから共通の利害が生まれると述べている。彼によれば，こうした理由から，帝国主義的干渉に際してはソビエト・ロシアを守るといった国際プロレタリアートの義務が生ずるのである。バウアーは，こうしてカウツキーを次のように批判する。すなわち，カウツキーのいうように，ロシア社会民主主義者がボリシェヴィキに対する人民の蜂起の先頭に立つと，彼らは，資本主義諸列強の反革命の道具に転化しうる，と[53]。

バウアーは，「マルセイユ大会」という論説では，以上のように，イギリス労働党左派とカウツキーから出された左右の二つの対ソビエト・ロシア政策を批判した。そして，マルセイユ大会で，この問題を論じ，これに関する見解の統一をはかるように訴えている。

しかし，現実には，マルセイユ大会で見解の統一をはかる試みは難航した。バウアーは，SAI 東方委員会の委員長として，ボリシェヴィキを無批判的に支持すると思われるイギリス労働党左派の主張とカウツキーの極端な反ボリシェヴィズムを仲介し，一つの妥協を見出そうと努力した。カウツキーは，グルジア出身やエス・エルの代議員と共同して，SAI がボリシェヴィキに対して自然発生的に生ずる人民の蜂起には肯定的にふるまうべきだと要求した。バウアーは，メンシェヴィキの支持をえてカウツキーらの要求を抑えた。が，妥協の結果として作成された最終決議案は，ボリシェヴィキを批判する側面がとりわけ強調されたもので，バウアーにとって不満の残るものとなった[54]。バウアーは，マルセイユ大会での報告のなかで，この不満をもらしている。彼は，東洋委員会の名で提出した決議案は，論争をへた長くて困難な作業の結果であった述べることから委員会の報告をはじめている。以下，この報告を簡単に紹介しておこう。バウアーは，次のように国際情勢の特徴を整理している。

戦後，東欧の新生諸国家の保護主義的で暴力支配的な傾向や，インド，中国，アフリカにおける民族解放運動の高まりによって，世界は著しく揺れ動いている。これらの歴史的な動きに対しては，帝国主義的諸列強とソビエト・ロシアが，世界政策を規定する二大勢力となっている[55]。このうち，ソビエト・ロシアは，帝国主義的干渉の危険にさらされている国であると同時に，アジア・アフリカにおける民族解放運動の好戦的な傾向の強化をめざす存在でもある。そして，その世界政策は，次のような特徴をもっている。

「ボリシェヴィズムは，その本質によれば，社会主義の好戦的な変種である。ボリシェヴィズムは，国内における解放が流血の内戦を通して達成されうると確信したとすれば，国外における解放も結局は資本主義的諸国民に対する革命的諸国民の流血の戦争を通してのみ達成されうると信じた。」[56]

つまり，バウアーは，ソビエト・ロシアの世界政策が，資本主義的諸国民に対する革命的諸国民の革命戦争を核心としており，彼らが，この観点から植民地諸民族の解放運動の好戦的気分を煽り，世界平和を脅かしていると理解しているのである。バウアーは，このような理解に立って，SAI がソビエト・ロシアに対してどのような態度をとるべきか，と問う。この点，バウアーによれば，SAI には二つの立場がある。

第一に，ソビエト・ロシアで弾圧にあったグルジア人やアルメニア人代表の立場で，彼らは

53) Ebenda, S. 102f.
54) Raimund Löw, a. a. O., S. 111-114.
55) Otto Bauer, Die Kriegsgefahren im Osten (Bericht an den Zweiten Kongreß der S. A. I. im Marseille 22. bis 27. August 1925), in: *W.A.*, Bd. 6. S. 117f.
56) Ebenda, S. 118.

ボリシェヴィズムに敵意を燃やしている。

第二に，自国政府の反ソ政策と戦っているイギリス代表の立場で，彼らの間には，ボリシェヴィキと無批判的に提携する傾向がある。

バウアーは，これら二つの立場に対して，自らの立場を対置する。まず，SAI の最高方針として，「ロシアから手を引け！」というスローガンを確認している。最終決議案でこの方針が大きく位置づけられていないという不満からか，バウアーは，「反革命的危険に対してソ連を守る」という SAI の義務を口頭で幾度も強調している[57]。他方では，ソ連の独裁体制等に対しては，次のような批判も行なっている。

すなわち，内戦時代には，独裁を正当化する客観的な背景があった。しかし内戦がすぎ去った今，ロシア人民が必要なのは政治的な自由であることは，争う余地がない。西欧文明の達成した成果すなわち個人的諸自由，精神的自由，組織的大闘争の自由を過小評価すべきではない。また，ボリシェヴィキの世界政策をなす革命戦争は，人類を最悪の貧困と野蛮に突き落とすゆえに支持しがたい，[58]と。

バウアーは，このようにボリシェヴィズムを批判する。が，それにもかかわらず，資本主義的諸列強の反ソ政策とソ連の民主化を要求するロシア社会民主主義者の闘争を区別する必要性があることを強調し，帝国主義的干渉に対してはロシアから手を引け，という立場を主張した。そして結局，決議案の妥協的性格や不十分さにもかかわらず，それが一定の前進を示していると述べ，決議案を受け容れるように大会代議員に訴えたのであった[59]。

バウアーは，以上のごとく，マルセイユ大会の報告において，ボリシェヴィキには政治体制の民主化を要求する一方で，帝国主義的対ソ干渉に対してはソビエト・ロシアを擁護する，といった彼の対ソ政策を高唱した。その際，前にも指摘したごとく，ソ連が革命的世界戦争を志向するという随分乱暴な主張もみられるが，ここではこれを深くは問わない。ただ，バウアーの報告のなかに，国際プロレタリアートの統一といった要求が欠如していることに注目したい。おそらく，彼は，SAI の大会のなかでこの要求を打ち出すのにまだ機が熟していないと考えたのであろう。バウアーは，この問題を，1928年の SAI ブリュッセル大会で取り上げることになる。この大会の前に，彼は「プロレタリア的世界政策」(1927年6月) という論説を書いて，英ロ委員会の破綻を事例として彼の基本的見解を明らかにしている。

前述のごとく，イギリス労働党左翼は，労働組合を舞台に，ボリシェヴィキと友好関係を築きあげていた。ところが，1926年におけるイギリスのゼネストの挫折を契機に，両者の関係が急速に悪化し，ついには1927年英ロ委員会が解散されるにいたった。バウアーは，この解散を「誤まった道の終わり」として歓迎し，こう述べている。

すなわち，ボリシェヴィズムとヨーロパ社会主義との対立が善意によって一夜にして克服できると考えるのは幻想である。未来の展望としてヨーロッパ社会主義を打ち砕き，ヨーロッパの労働者大衆を分裂させうるとボリシェヴィキが考えているかぎり，どんな共闘会議や統一委員会の形成の呼びかけもマヌーバーにすぎない。ボリシェヴィキと社会民主主義者の協調は，ボリシェヴィキがヨーロッパ社会主義を消滅させえないと洞察したときに初めて可能となろう。この時は必ず来る。つまり，ソ連の内部，ヨーロッパ，さらにアジアにおける発展がボリシェヴィズムの展望をますます明白に反証し，ボリシェヴィキがその考えを変え，ヨーロッパの道を尊重するにいたる時が，それである。その前の時期尚早の協調の試みは，新たな紛争や対立を生むにすぎない。このことを英ロ委員会の経験が示した，と[60]。

57) Ebenda, S. 120-122.
58) Ebenda, S. 122-124.
59) Ebenda, S. 127.
60) Otto Bauer, Proletarische Weltpolitik (Salzburger Wacht, 16. Juli 1927), in: *WA.*, Bd. 7, S. 649f.

この論説は，国際プロレタリアートの統一問題に関するこの時期のバウアーの考えを明白に示していて興味深い。バウアーは，1922年における三つのインターの統一会議の挫折した経験をへて，時期尚早のインターナショナルの統一の試みを警戒するようになった。つまり，彼は，ボリシェヴィキが，社会民主党を打倒し，労働者層をそれから奪い取りうると信じているかぎり，ボリシェヴィキの例からの統一や協調のどんな呼びかけもマヌーバーにすぎないとみなして，これを拒否したのであった。1920年代中頃，オーストリア労働者代表団の訪ソ計画に彼が反対したのもこうした理由からである。彼は，国際プロレタリアートの統一については，資本主義の安定が世界革命へのボリシェヴィキの幻想を打ち砕き，ボリシェヴィキが現実主義的な国際政策をとり，その上国内の民主化を進めたときに，統一を実現する客観的条件が形成されると主張したのであった。

さて，1928年8月，SAI ブリュッセル大会が開催された。バウアーは，この大会では，「世界政治情勢と国際労働運動」に関する報告を行なった。以下，この報告について，簡単に紹介したい。

バウアーは，まず，革命的闘争の時代が過ぎ去り，資本主義が安定化するにいたっていると確認することから，この報告をはじめている。彼によれば，革命的過程の終焉によって，二つの自暴自棄の理論が生まれた。第一に，労働者階級の政権獲得を遠い未来に移す「ネオ修正主義」の理論と，第二に，新たな帝国主義戦争の勃発に社会主義の勝利の望みを託すコミンテルンの理論である。バウアーはこれらに対しては，社会主義の勝利への展望が資本主義の発展傾向そのものから開けると述べている。つまり，資本主義が金融・産業独占にますます向かい，世界経済に対する専制的な支配を打ちたてると，これと，国家内における人民の民主的自治とが耐えがたい矛盾に陥り，かくして社会主義の問題が提出されると強調しているのである[61]。バウアーは，この社会主義の勝利の前提として，世界プロレタリアートの統一の問題を取り上げている。そして，この問題を考察するにあたって，世界経済に関する次の二つの基本的事実を指摘している。

第一に，資本主義世界経済の重心がアメリカに移り，アメリカが資本主義世界の指導国になっている。

第二に，中国革命などにみられるように，アジアの民族の民族解放闘争が急速に進んでいる。

バウアーは，第一の点については，アメリカのプロレタリアートが国際プロレタリアートの共同闘争にもう少し結集するように訴えている[62]。第二の点については，次のような少し興味深い発言を行なっている。

「ヨーロッパの経験から知られているのと同じ資本主義の発展とブルジョア革命の法則が，今日，極東でも妥当しているのを目にする。その存在と政策によって，東洋の諸民族に対して東洋の民族革命を促進したことは，疑いもなくソビエト政権の世界史的功績の一つであり，おそらくその最大のものであろう。しかし，まさにそのことから，東洋の諸民族のなかに，本来ロシアでマルクス主義が生じ克服せねばならなかったのと同じ誤まった幻想が生じたのは，世界史のウィットであった。／……ロシア社会主義が，初期，ロシアにはヨーロッパとまったく異なる発展法則が妥当し，ロシアは資本主義の中間段階を通過する必要なく，ロシア農村共同体をベースとして一足飛びに前資本主義社会から社会主義社会に移行しうるという幻想を述べていたことが思い出される。……今日，東洋における革命的過程が進むなかでも，多くの点でロシア・ナロードニキのかつての幻想を思い出

61) Otto Bauer, Die weltpolitische Lage und die internationale Arbeiterbewegung (Bericht an den Dritten Kongress der S. A. I., Brüssel, 5. bis 11. August 1928), in: *WA.*, Bd. 6, S. 143-146.

62) Ebenda, S. 147f.

させる幻想がふたたび生じるのを体験した。」これは，ボリシェヴィズムの影響を受けている。ロシア・マルクス主義から生じたボリシェヴィズムは，東洋の前資本主義的半封建的社会秩序から一飛びに社会主義にいたりうるという幻想に近づいたのである。しかし「最近の経験は，極東における発展もヨーロッパと同じ法則に服することを示している。」したがって，極東のプロレタリアートは，ヨーロッパの経験から学び，冒険によって破局と敗北に終わることを避けなければならない[63]。

バウアーは，このように，いささか西欧中心主義的な観点にたって，社会主義への非資本主義的な道を否定している。そして，西欧の経験と方法を基盤として，西欧プロレタリアートと極東プロレタリアートを共同闘争へと統一することを訴えている。

ところが，この国際プロレタリアートの統一を実現するうえで，大きな障害がある。バウアーは，この点，コミンテルン第6回大会1928年7月～9月）で打ち出された新戦術について，こう言及している。すなわち，コミンテルンの新綱領は，労働者階級の分裂を災いとみず，この分裂を激化し永遠化しようとして，世界の社会民主主義者に戦争宣言を発している，と。論説「プロレタリア的世界政策」でコミンテルンの側からの SAI への歩み寄りを期待していたバウアーは，ここではいたく失望の色をみせている。しかし，それでもなお，彼は資本主義の安定が，ボルシェヴィキの諸見解を反証し，彼らをして社会民主主義と同じ民主主義の道を歩むしかありえなくするであろうと述べることによって，将来における国際プロレタリアートの統一を展望したのであった[64]。

我われは，以上，1920年代における SAI の国際政策との関連で，ソビエト・ロシアに対するバウアーの見解を取り上げた。結論的にいえば，バウアーは，1920年代に，ソビエトの政治的民主化を主張する一方で，帝国主義的干渉に対してはソ連を擁護するという立場を一貫して主張した。そして，ボリシェヴィキが自己の非を悟り，社会民主主義に歩み寄るといったことを期待して，国際プロレタリアートの統一を目指したのであった。

63) Ebenda, S. 149f.
64) Ebenda, S. 151ff.

V　1930年代ソビエト・ロシア観

我われは，以上，ロシア革命初期から1920年代末にかけてのバウアーのソビエト・ロシア論を検討してきた。バウアーの見解は，小括すると，その間，情勢の推移にしたがって，かなりの変化をみせてきた。

2月革命のときは，バウアーは，ロシア革命が社会主義を実現するものではなく，民主主義革命にとどまるであろうと述べた。ところが，予想に反して，10月革命が勃発した。このとき，バウアーは，10月革命を挫折の運命にある時期尚早の社会主義革命だと規定した。

しかし，ソビエト政権は，内戦にもちこたえ生き延てゆく。かかる事態に直面して，バウアーは，1920年，戦時共産主義を「専制的社会主義」と特徴づけたうえ，内戦終了後には資本主義とも社会主義ともいえない「社会的混合形態」に移行せざるをえないと予測した。1921年のネップ（新経済政策）の導入は，バウアーの予測が比較的当たった部類に属する。とはいえ，バウアー自身は，ネップの導入を目にして，そこに資本主義の復活と農民・ブルジョアジーによる政治支配への移行の道を見出した。だが，この見通しもはずれた。

1920年代中頃，バウアーは，ふたたび「社会的混合形態」規定に立ち戻っている。そして，政治的には，当時の共産党指導下の独裁が，農民，労働者，ブルジョアの三階級の力のバランスの上にたった，ボナパルチズムの性格をもつと解したのであった。このとき，注目すべきことに，バウアーは，もし帝国主義的対ソ干渉が生じなければ，ロシアが1国で社会主義への道

を歩みうるかもしれないという考えを示すにいたった。つまり，ネップを社会主義への現実主義的路線と捉えなおし，ロシアが「社会的混合形態」を通じて工業化を推進し，ひいては社会主義にいたりうるという理解を示したのである。バウアーは，こうした観点から，SAIの舞台では，ボリシェヴィキには政治体制の民主化を要求し，帝国主義的な干渉に対してはソビエト・ロシアを守るという政策を貫いたのである。

バウアーは，このように大きく見解を変えてきたが，そこには次のような葛藤がみられる。すなわち，マルクスの唯物史観の公式に基づき，社会主義が西欧先進国で真っ先に実現されるのであり，後進国の発展が西欧を模範とするといったいささか西欧中心主義的な観点に立つ一方で，彼は，客観的な分析に基づき，社会主義への特殊ロシア的な道がありうるのではないか，と絶えず揺れ動いたのである。「混合的社会形態」という規定は，こうした動揺から生まれた。この「混合的社会形態」規定は，一方で，経済的に未成熟なロシアでは社会主義を直接的に実現できないという理解に立ちながらなお，ネップ下で工業化の推進を通して社会主義に向かう特殊ロシア的な道もありうるのではないかと思いまどうバウアーの気持の揺れを示すものであった。だから，レウのように，バウアーが五ケ年計画までロシアにおける社会主義の発展の可能性を認めず，五ケ年計画の遂行をみて，その見解を突然変えるにいたったと解釈するのは，首肯できない。むしろ，バウアーは，それ以前にすでに，「社会的混合形態」下，農民を豊かにして得られた穀物余剰を蓄積基金にして工業化を進めると同時に政治的民主化へと向かう，いわば社会主義への穏健的な路線をネップに見出していた。それでは，五ケ年計画を契機としたバウアーの転換は，いったい何を意味していたのだろうか？以下，この点に留意しつつ，結びにかえて，1930年代におけるバウアーのソビエト・ロシア観を簡単に素描しておきたい。

前述のように，バウアーは，ネップをロシアにおける社会主義への現実主義的路線であるとみなしていた。だから，1928年から1929年にかけてスターリンが急激に路線転換し，強制的農業集団化と五ケ年計画の道を歩みはじめたとき，バウアーは最初これを空想的な冒険主義的行動であると批判した。そして，スターリンとブハーリンら右派との闘争においては，ブハーリンらを支持したのであった。

しかし，1930年に入ると，資本主義が世界大恐慌に襲われる一方で，五ケ年計画によるロシアの工業化が推進されるのをみて，バウアーは，スターリン路線に関する評価を変えはじめた。彼は，1931年に，『合理化－誤まった合理化』（『世界大戦後の資本主義と社会主義』第一巻）の最終章において，五ケ年計画について詳しく分析した。そして，資本主義の達成した合理化の方法を役立てることによって社会主義社会の基礎を一挙に建設する試みであると五ケ年計画を捉えたのである。注目すべきことに，バウアーは，その際，五ケ年計画の導入による「類いなき変革は，テロ独裁のもとで遂行され，そのもとでのみ遂行されうる」と述べている[65]。というのは，テロ独裁のみが，五ケ年計画の要求する苛酷な犠牲を農民や労働者に強要することができるからである。したがって，バウアーは，五ケ年計画に関して，スターリンの積極的な功績と犯罪的な誤まりとを分けて評価する態度をとらない。両者を不可分なものであるとみなすのである。なお，この時点でも，彼は，ネップの継続をソビエト・ロシアのより確実な工業化の道であると相変わらず考えている[66]。それに対して，スターリンによる工業化をテロ独裁に依拠した冒険主義的で危険な賭けとみなした。とはいえ，その成功の確率がきわめて高いとも予想したのであった。バウアーは，結局工業化によって人民の生活水準が高まり，それにとも

65) Otto Bauer, *Rationalisierung-Fehlrationalisierung*, Wien 1931, S. 218.
66) Ebenda, S. 214.

ない教育・文化水準が高まるにつれて政治的民主化の道が拓かれ，「独裁の国家資本主義から社会の社会主義的組織が生まれるだろう」と結論している[67]。

バウアーのこうした見解の変化は，何を意味しているのであろうか？レウがいうように，ここで初めて，バウアーがロシアにおける社会主義的発展の可能性を是認したと解さねばならないのだろうか？否，そうではない。バウアーのこうした見解の変化は，混合的社会形態の漸次的発展を通したネップ的な社会主義変革路線以外に，戦時共産主義的ともいうべき，暴力と強制による急激な社会主義的変革の道の成功する可能性を認めるにいたったことを意味するのである。彼は，これまで，ボリシェヴィズムを根本的に特徴づける空想的な考えだと，戦時共産主義的方法を論難してきた。ところが，今や，ネップの継続の方がより確実だといいながらも，戦時共産主義的な性格をもつと思われるスターリンの五ケ年計画の成功の確率も高いと認めるにいたったのである。バウアーは，後に，スターリンの路線転換の動機について，農村ブルジョアジーの発展によって脅かされたために，ネップ・ブルジョアジーやクラーク階級を暴力的に清算し，工業化と農業集団化に踏み切ったとさえ指摘している[68]。

それはともあれ，バウアーの如上の見解の変化は，当時，社会民主主義者の間で激しい反発を生み，五ケ年計画をめぐる論争をまねいていったのであった。批判者の間でとくに疑問を投げかけられたのは，バウアーの見解がもし正しいとすると，ソビエト・ロシアにおいてロシア社会民主主義者が果たしうる役割がもはやなくなるのではないか，ということであった。バウアーは，1931年の「ロシア社会民主党の将来」という論文で，これにこう答えている。

これまでの歴史にみられるように，専制的権力が自発的に自らの絶対的権力を放棄することはありえない。ロシアにおいては，人民の民主化要求によって初めて，民主主義の実現は可能となる。だから，ロシア社会民主主義者は，この人民の民主化運動の先頭にたつという歴史的な使命をもつ，と[69]。

この点，バウアーは，ソビエト・ロシアが独裁体制から民主主義へと転換する可能性を，人民の経済的向上にともなう文化水準の向上，そしてこの向上に応じた政治的権利の主張に見出していた。彼によれば，文化的教養的水準の高い人民は，もはや独裁的抑圧体制にがまんできず，独裁者から政治的譲歩を獲得する積極的な運動を行ない，独裁者も人民の要求に譲歩する理性的な対応を示さざるをえない。

それ以後，バウアーは，こうした見地にたって，ソビエトの機能回復なり民主化といった要求を当面掲げながら，ソビエト・ロシアの政治的動きに注目した。ソ連の民主化は，ファシズムと世界戦争の危険に対する闘争に国際プロレタリアートを結集し，統一戦線を形成するうえでも重要であった。というのは，コミンテルンとの共闘を拒否する，SAI 内のイギリス労働党などの右翼社会民主主義政党の口実が，ソ連における独裁体制に対する批判にあったからである。バウアーは，SAI 内のこうした右派に対して，改良的社会主義と革命的社会主義を総合した「統合的社会主義」の理念を掲げ，反ファシズム統一戦線を形成するために尽力した。そして，ソ連の民主化の点で，たとえば，1936年のスターリン憲法に民主化への一歩前進を見出し，これに大いに期待した。しかし，その後の選挙のやり方をみて，いたく失望した。さらに，モスクワ裁判と粛清の嵐を目にして，ひどく落胆してしまう[70]。バウアーは，結局，モスクワ裁判の結果をすべてみることなく，1938年，

67) Ebenda, S. 223.
68) Otto Bauer, Die Zukunft der russischen Sozialdemokratie (Der Kampf, 1931), in: *WA.*, Bd. 9, S. 280.
69) Ebenda, S. 286f.
70) Raimund Löw, a. a. O., S. 233ff.

パリのホテルの一室で，心臓発作に襲われ，客死したのであった[71]。

〔追記〕 私は，1985年9月から1986年2月まで，北海道大学経済学部において，文部省内地研究員として研究に従事した。小稿は，この研究成果の一端である。なお，レウ（Löw）の原書については，竜谷大学の松岡利道氏の蔵書を利用させていただいた。

71) *Otto Leichter, Otto Bauer, Tragedie oder Triumph*, Wien Frankfurt Zürich 1970, S. 20ff.